慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『六条修理大夫集』考
Sub Title	
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1983
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.20 (1983.) ,p.431- 447
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000020-0431

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『六条修理大夫集』考

川上新一郎

六条藤家の祖藤原顕季については、かつて伝記考証を行なったことがある。[1] 一方その家集『六条修理大夫集』については若干の私見を述べたこともあり、[2] また井上宗雄氏『平安後期歌人伝の研究』（八五―九五頁、昭53刊）や『私家集大成』第二巻解題（上野理氏執筆、昭50刊）によって、和歌の年次推定や諸本の分類が明らかにされている。従って基礎的な事柄についてはほぼ明らかになっていて、もはやつけ加えることはあまりないのであるが、近時、所在不明であった伝寂蓮筆本が大東急記念文庫に所蔵されていることが判明したので、これを機会に、基礎的な資料をまとめて置くのも必要かと考え、先学の驥尾に付して考察を試みることとする。

一、諸本

『六条修理大夫集』には異本はなく、基本的には一系統であるが、本文の特徴により分類を試みると次のようになる。

(イ)大東急記念文庫蔵伝寂蓮筆本
(ロ)京都大学蔵本
(ハ)神宮文庫蔵本（『私家集大成』底本）、書陵部蔵御所本、書陵部蔵谷森本
(ニ)竜谷大学蔵本、松平文庫蔵本、彰考館蔵本、群書類従本、国会図書館蔵本、天理図書館蔵本
(ホ)河野信一記念文化館蔵本、竜谷大学蔵四十人集本、内閣文庫蔵本、神宮文庫蔵一本、大阪府立図書館蔵本、国会図書館蔵二十六家集本
(ヘ)神宮文庫蔵御巫本

以上における分類基準は次の諸点である。

1、338の詞書（『私家集大成』による、濁点私意、以下同じ）中、「しぶくやまをもすべらかにこえにければ、(A)さもあはれなりける身のありさまを、もてあつかひて、（中略）おもひでもなき宮こなれど、さゝがにの(B)ほそかりけることなれば、」の(A)(B)にそれぞれ(A)「竹のみやこにたびねを

して、よゝのふるごとをさへおもひつゞくれば」(B)「いとびさしくかきたえぬるはこゝろ」(大東急記念文庫蔵本による)を有するか否か。

2、42の詞書中「正月十日行幸ありしつとめて、雪のふりたりしに、内侍すわうさぶらふと聞て、つかはしたりし」の傍点部分を有するか否か。

3、『堀河院百首』を有するか否か。

4、92「万代の」の歌本文を有するか否か。

以上の諸点について一覧すると次のようになる。

	(イ)	(ロ)	(ハ)	(ニ)	(ホ)	(ヘ)
1	有	有	無	無	無	無
2	有	有	無	無	無	欠
3	有	無	有	無	無	有
4	有	有	有	有	無	欠

詳細は後述するとして、(イ)〜(ヘ)の関係について大まかに述べると以下のようになる。

(ロ)がやや異色の本文を持つ他は、(イ)(ハ)〜(ヘ)は親近した本文を持っている。[3] そして(イ)大東急記念文庫蔵本は、鎌倉期の書写と考えられる唯一の古写本であり、欠脱もない最善本であるが、独自の誤りが(ハ)〜(ヘ)には継承されていないことにより、(ハ)〜(ヘ)のいずれの祖本でもない。また(ハ)〜(ホ)は本文的に極めて近く、順に誤脱を加え、末流化したと考えられる。(ヘ)はさしたる善本でもないので、特に注目する必要も認められないが、分類するには困難を感ずる本である。前掲分類基準の2、4の二点につき「欠」としたのは、その部分がちょうど落丁に当っていて有無がたしかめられないことを示すが、3の『堀河院百首』も後述するような理由で本来なかった可能性が高い。さりとて本文の比較からは、到底(ホ)には分類できず、いずれの分類にも入れ難く、別立てにしたものである。

以下諸本の書誌と問題点を記述する。

(イ)

大東急記念文庫蔵(一〇五—二二—一)本　一帖

〔鎌倉後期〕写・伝寂蓮筆

斐紙綴葉装。濃緑色地寒山拾得図金泥緞子表紙(二三・六×一六・三糎)。見返、銀切箔散し。第一葉オを扉とし、中央に題簽「顕季集　寂蓮筆」とあり、右肩の短冊に「寂蓮法師(顕季外題)集一冊(たつねこぬ)冷泉殿為広卿御筆」とし「琴山」の印がある。墨付、六五丁(扉は除く)、遊紙、前(扉の次の丁)一丁、後四丁。字面高さ、約一九・七糎。毎半葉一〇行書、和歌二行書。扉の次一丁おいて、内題なく本文に入る。全巻一筆で、135は片仮名で、260は平仮名で小字書入されている。奥書、終丁オに「重校二合他本二了/和哥三百冊九首(其中人哥卅三首詞五通□□□入)」とある。[4]

また、昭和一七年五月三〇日付の旧蔵者遠藤武氏宛の重要美術品認定証が付されている。[5]

書写年代は『大東急記念文庫貴重書解題』第三巻国書之部(昭56刊)は「鎌倉初期写」とするが、同筆の集付が『続古今集』まであることから、その成立の文永二年(一二六五)以後であること

は明らかであり、鎌倉後期まで下ると考えられる。しかしながら他の諸本がいずれも近世の写本であり、それも中期以後と思われるものが多いことを考えると、欠脱のない唯一の古写本として極めて有力な伝本である。

また本文的にも優れた点が多く、殊に前述の分類基準1(A)(B)の部分は本書と(ロ)京都大学蔵本のみに存するものである点重要である。そこで、本書は書写年代が古いことから、本文的に近い関係にある(ハ)以下の諸本の祖本ではないかという疑いが生じるが、調べてみるとそうではないことがわかる。

なぜなら、本書には本文的に優れている点がある一方、独自の誤りも散見され、それらが(ハ)以下に継承されていないからである。中には意改によって正すことが可能と思われるものもあるが、到底不可能なものもあり、殊に235下句が本書で「さやぐしもより(ママ)をしのひとりね」とあるのは、238下句を誤って書いたもので、他の諸本はいずれも正しく「暮行秋のとまり成らん」となっていて、本書を祖本としていないことを示している。

以下、『私家集大成』本と比較して重要な異文（必ずしも独自異文ではない）を示してみる。上が本書、下が『私家集大成』本である。

17詞書いたうなうらみず(7)—いたしなとゝみず
26とほりのおのゝ—とほりのおぎの
36詞書橘長基—橘のなりとも
53かたきしに—かたしきに
77うらみかね—恨かな
89きかましや—きかじとや
138詞書前木工頭俊頼朝臣の北方の、はな見に人〳〵さそひて
　まかりけりときゝて—前木工頭俊頼朝臣の、北山の花見に
　人々さそひてまかりたりけり、ときゝて
161詞書落葉水紅—落葉浮水
176～180題を最初に列記し、歌ごとに掲げない。
216はとふく秋に—ほとふく秋に
250なりやしぬらん—夜やなりぬらん
267さかゐがは—たかは川
285詞書新中将渡本院、初恋和哥—新中将渡中院（中院右大臣也）、初祝歌
286～288題を最初に列記し、歌ごとに掲げない。
295詞書つねにましかよはす人〳〵—つねにましかはす人々
同そらゆくとりのすぎもはべるかな—空行とりのすけもはん
　べるかな
296おとなはゞ—をとなはじ
339詞書しぶくやまのなをたのみおもたま(ママ)へしかど—しぶく山
　のなをたのみをも、玉ぐしかと
354あさましきまで—あさましきとて

本書にもかなり独自誤謬と思われる点があるが、それらはあげていない。ただ、以上の中、138詞書、285詞書については本書の方が誤りであろう。なお、(ハ)以下の諸本はほとんど『私家集大成』本と同一である。一方、(ロ)京都大学蔵本は全体としては本書と大分異なるが、掲出個所では本書に一致する場合が多い。その点(イ)(ロ)の両本が、(ハ)以下の諸本とやや異なる古い形を

残している面があるといえるであろう。

(ロ)

京都大学付属図書館蔵（四―二三―ロ―七）本

〔江戸前期〕写　一帖

斐紙綴葉装。打曇表紙（一六・六×一五・二糎）、中央打付書「六条修理大夫集」。墨付、四九丁、遊紙、前一丁、後二丁。字面高さ、約一五・〇糎。毎半葉一一行書、和歌二行書。内題なく、一オより本文に入る。奥書なし。印記、一オに「図書／寮印」の朱印があり、見返しに「宮内庁寄贈本」の印がある。

本書は定家様の書体の古写本を近世に臨写したものであり、『六条修理大夫集』諸本の中では、最も異文の多い特色ある伝本であるが、底本の破損もしくは切取によると思われる空白がある他、誤写（その多くは底本にすでに発生していたか）も多く、全体としては善本といい難い。『私家集大成』解題中に言及されている他、内田徹氏「翻刻　京都大学付属図書館蔵定家本六条修理大夫集」（「国文学研究」80昭58・6）に翻刻があり、全容が紹介されているが、欠脱の状態を改めて述べると以下のようである。

主たる欠脱もしくは省略個所は8詞書の一部（底本虫損か）、117詞書より119詞書まで（二二オ白紙）、『堀河院百首』（180に続いて281を空白なしに書写し、「有二堀川院／百首一／不二書写一」と頭注、字体は定家様）の三個所である。また368の後、四九ウに

一品経供養冬興歌、妙荘厳／王品

すゝめずはおやはやみにやまどは／ましおもへばこゝぞあはれなりける

此哥不レ被二書入一、随二思出一追所二／書入一也

と他本に見えぬ歌一首が書入れられている。

本書には独自異文がかなり多いが、また(ハ)以下の諸本と異なり(イ)大東急記念文庫蔵本と一致する個所も散見される。前掲の個所でいえば、216 250 267が『堀河院百首』で欠けており、17詞書、138詞書、161詞書、285詞書、295詞書「そらゆくとりの」が、それぞれ独自異文である他は、ほぼ(イ)大東急記念文庫蔵本に一致している。

以下独自異文を幾つか例示する。上が本書、下が『私家集大成』本である。

1詞書承暦四年―承暦二年

8さながらをしき―さながらおほき

68詞書新大納言のもとに―大納言公実の許に

82さすをこそみれ―さすをこそまて

108詞書三月廿日あまりのころほひに―三月二十日余比

115詞書さきのさい宮―前斎院

136みぬよそ人の―見ぬまで人の

141詞書人〳〵十首恋哥―歌十首恋の歌

142なごりこひしき―なごりさびしも

168くるゝかと―あくるかと

308きのしらつゆに―木の下の露

319詞書於桂山庄庭花纔残并恋催旧意題―於桂山庄、花纔残并

恋催旧意

323詞書土左守渡播磨守行日―とさのかみ、はりまのかみのも
とへわたるひ

323さびしかりけれ―ひさしかりけれ

339詞書みづがきのいとひさしく(8)―みな月のいとひさしくも

362詞書くら人の少将―くら人のぶつね

この中、115詞書、168、339詞書、362詞書等は当否はともかく、一応注目される。

(ハ)

神宮文庫蔵（三―一〇六八）本　一冊

〔江戸中期〕写

薄葉紙袋綴。薄茶色地唐草文様空押表紙（二七・四×一九・二糎）、左肩題簽「顕季集」その下部に「完」と打付書。墨付、五〇丁、遊紙、前後各一丁。字面高さ、約二一・〇糎。毎半葉九行書、和歌一行書。内題、一オに「六条修理大夫集」。奥書は、四八ウに、

和哥三百四十九首（其中人哥三十三首詞五通其三百首入）

治承（本云）四年九月二十八日書写了

建長五年正月五日以三藤三位本一書写校合了

文明二年五月於三秩父墨土陣下一書写之早、仍校／合了

とあり、更に四九オからウにかけて、

入三乍撰集一不レ見三家集一哥、追私書之

池氷をよめる

さむしろに思ひこそやれさゝの葉のさゆる霜夜のをしのひ（金）

とりね

題しらず（続後撰）

くるゝかと見るほどもなくあけにけりおしみもあへぬ夏の夜の月

夕月夜たもとすゞしく吹風にいる野の鹿はいまや鳴らん（続後拾）

家哥合し侍けるに紅葉を

色ふかきみ山がくれのもみぢ葉をあらしの風のたよりにぞ見る（続千）

堀川院位におはしましける時、修理大夫家保」はじめて蔵人になりて、事にしたがひける日さ／うぞくすとて　周防内侍

千とせふる雲井にきたる鶴の子のすだちはじむる毛衣ぞこれ（新千）

千代ふべき雲井にさしてすだちゆく鶴の毛衣みるぞうれしき（同返し）

大井川逍遙に水上落葉といふ事を

大井河くれなゐふかくにほふかなをぐらの山の／紅葉ちるらし（新続古）

五〇オに、

此本自三或方一尋出令三書写一、雖レ然事外／荒本也、以三他本一遂三校合一者也

中大夫平朝臣

とある。この奥書及び「入三乍撰集一不レ見三家集一哥、追私書之」は、(ハ)以下の諸本にはほとんど全てにあり、例外は、(ニ)群書類

従本が「入二乍撰集一」以下を欠くのと、(二)竜谷大学蔵本が「此本自二或方一尋出」以下を欠くのみである。

印記は一オに「林崎／文庫」「林崎文庫」「万年橋南散人円斎画鏡蔵書」の朱印がある他、裏表紙見返しに、「天明四年甲辰八月吉旦奉納／皇太神宮林崎文庫以期不朽／京都勤思堂村井古巌敬義拝」の奉納印がある。

本書は『私家集大成』底本ゆえ、内容について詳述しないが、(ハ)以下の諸本に共通の338詞書の二個所の脱文を除けば、誤脱の極めて少ない善本である（誤写の数は(イ)大東急記念文庫蔵本より少ない）。

宮内庁書陵部蔵（五〇一―三六）本

〔江戸前期〕写　一帖

斐紙綴葉装。縹色地唐花唐草文様金繻子表紙（二三・六×一七・五糎）、左肩題簽「六条修理大夫集顕季卿」。墨付、四四丁、遊紙、前後各一丁。字面高さ、約二〇・〇糎。毎半葉一〇行書、和歌一行書。内題、一ウに「六条修理大夫集」。奥書は四三オより四四オにかけて神宮文庫蔵本と同一のものがあるが、「其三百首」が「共三百首」、建長の奥書の右肩に「本云」、周防内侍歌の詞書に「さうぞく遣すとて」とあり、「同返し」が「同」とある点が異っている。本書は全体として誤写の少ない善本であるが、数個所にわたって一字乃至一首に及ぶ空白がある。『私家集大成』本によって示すと次の個所である。

17詞書「いたしなとゝみず」以下、詞書の終りまで空白。
25詞書「とば」の部分空白。
31詞書「しま」以下詞書の終りまで空白。
92詞書「松契遐年」の「遐」空白。
118「まがき」の「ま」空白。
175詞書「暁景恋」の「景」の上空白。
243「いはゝ」の「ゝ」空白。
250歌一首空白。
280第二句以下空白。
295詞書「はれま」の「ま」空白。
326詞書「止宿草庵題を」空白。

これらの欠字は、底本の虫損もしくは破損によるもののように思われるが、丁寧な書写態度であるにもかかわらず、欠字部分に何らの注記や説明もなく、またその部分は多く意の通じにくい個所や、不審の個所を含んでいるので、あるいは、本文を再検討して、後に補塡するつもりが、そのままになったのかもしれない。

本書と神宮文庫蔵本とは、直接の転写関係を想定するほどの本文の酷似はない。

宮内庁書陵部蔵（谷―二二一）本

〔江戸中期〕写　一冊

薄手楮紙袋綴。薄茶色表紙（二八・〇×一九・三糎）、左肩題簽「六条修理大夫顕季集」。墨付、四五丁、遊紙なし。字面高さ、約二三・〇糎。毎半葉一〇行書、和歌一行書。一オを扉とし、左に「六条修理大夫集顕季」とし、二オに内題「六条修理大夫集」とし本文に入る。奥書、書陵部蔵（五〇一―三六）本に同

じ。四五オ左下に「一校了」とある。谷森善臣旧蔵本。

本書は、前記書陵部蔵本の臨写に近い転写本であり、字詰から仮名の字母に至るまでほぼ同一である。ただ、前者が裏丁から書き始めているのに対し、本書は表丁から書き始めている点のみ異っている。また、若干の書き入れもあるが、前記欠字の部分はそのままになっている。

(二)

この一群は、群書類従本の転写本である国会図書館蔵本、天理図書館蔵本と、非転写本である竜谷大学蔵本、松平文庫蔵本、彰考館蔵本とに分けられ、この中、松平文庫蔵本と彰考館蔵本は本文に誤脱が多く、次の(ホ)に接近する伝本である。

竜谷大学大宮図書館蔵（九一一、二三―四一）本　一冊

〔江戸中期〕写

藍色表紙（二七・四×一九・八糎）、左肩題簽「顕季集」。墨付、四四丁、遊紙なし。字面高さ、約二一・五糎。毎半葉一〇行書、和歌一行書。内題、一ウに「六条修理太夫集」。奥書、四三オより四四オにかけて神宮文庫蔵本の項に掲げたのと同一のものがあるが、「此本自二或方一尋出」以下を欠く。ただし、字句の異同が若干ある。上が本書、下が神宮文庫蔵本である。

共三百首入―其三百首入

治承四年―治承四年（本云）

以二藤三位本一書写校合―以二藤三位本一書写校合了

於二秩父墨陣（ママ）下一書写之、仍校合早―於二秩父墨土陣下一書写之早、仍校合了

私書之―追私書之

さうぞく遣すとて―さうぞくすとて

雲ゐにさして（をイ）―雲井にさして

集付の書き方の違いは省略した。印記、見返しに「写字台之蔵書」の朱印。

本書の本文は、群書類従本とそれ程は似ていない。恐らく群書類従本は本書のような本文に独自の校訂を加えて、成立したのであろう。

島原公民館松平文庫蔵（一三五―三八）本　一冊

〔江戸前期〕写

原本未見。慶應義塾大学付属研究所斯道文庫所蔵のマイクロフィルムと書誌カードによる。

楮紙袋綴。縹色行成表紙（二七・六×二〇・二糎）、左肩布目金紙題簽「六条修理大夫集」。墨付、六六丁。字面高さ、約二〇・五糎。毎半葉一〇行書、和歌二行書。内題、一オに「六条修理大夫集」。奥書、六四ウから六六オにかけて神宮文庫蔵本と同一のものがあるが、字句の異同がある。上が本書である。

治承四年―治承四年（本云）

書写早―書写了

書写校合―書写校合了

書写之、仍校合早―書写之早、仍校合了

私書之―追私書之

池水―池氷

さうぞく遣すとて―さうぞくすとて

「千代ふべき」の一首なし。

殊外―事外

集付の書き方の違いは省略した。印記は、六六ウに「尚舎源忠房」（陽刻）「文庫」（陰刻）の印がある。本書は、264下句を、丁の表より裏へ移る時、誤って書き落としてしまうという独自誤謬がある他、かなりの誤字があり、その多くが次掲彰考館蔵本と共通であり、またその一部は(ホ)の諸本とも共通である。

彰考館蔵（巳五・〇六九二一）本　一冊

〔江戸中期〕写

『顕輔集』『清輔朝臣集』と合綴。楮紙袋綴。茶表紙（二五・三×一八・四糎）、左肩題簽「顕輔集／清輔集」とあり、『六条修理大夫集』の表示は本来ないが、比較的近時の筆で「顕輔集」の下に「六条修太(ママ)夫集」と小さく書き入れられている。墨付、一～四三丁が『六条修理太夫集』、四四～六四丁が『顕輔集』、六五～一四一丁が『清輔朝臣集』、遊紙なし。字面高さ、約二一・〇糎。毎半葉一〇行書、和歌一行書。内題、一オに「六条修理太(ママ)夫集」。奥書、四二ウより四三ウにかけて、神宮文庫蔵本と同一のものがあるが、細部の字句は、松平文庫蔵本に最も近い。松平文庫蔵本と異なる個所のみ示す。上が本書、下が神宮文庫蔵本である。

私書―追私書之

山風(ママ)のかぜの便りそぞ(ママ)みる―あらしの風のたよりにぞ見る

「千代ふべき」の一首はある。

此本自レ方尋出―此本自二或方一尋出

本書は、松平文庫蔵本に親近した本文を持ち、誤脱は相互に出入りがある伝本である。ただし、264下句の書き落しはない。

群書類従本　一冊

刊

慶應義塾図書館蔵（九六―一）本による。『群書類従』巻二四五所収。『左京大夫顕輔卿集』と合綴。香色布目表紙（二六・〇×一七・六糎）。左肩単郭題簽「羣書類従　二百四十五」。墨付、一～四三丁が『六条修理大夫集』、四四～六六丁が『左京大夫顕輔卿集』。無辺無界、一〇行、印面高さ、約二〇・〇糎、和歌一行書。内題、一オに「羣書類従巻第二百卅五／検校保己一集／和歌部百家集十八／六条修理大夫集顕季卿」とある。奥書、「文明二年」のものまでを有し、「入二乍撰集一」以下を欠く。字句は、松平文庫蔵本、彰考館蔵本とほぼ同じだが、建長五年奥書中「書写」の「書」の一字を欠いている。更に、右奥書の後に「右顕季卿集以二百花菴宗古本一校合畢」とある。本書は、諸本が出入りは大きいながら何らかの形で存在する集付を全く欠く他、比較的独自異文が多い。それらは刊行に当っての校訂の結果であろう。

なお、続群書類従完成会の活版本は、仮名に漢字を当てている他、集付と校異を加えている。〔　〕の付されている字句は、版本には存在しないものである。

国会図書館蔵（一一五―三二）本　一冊

〔江戸末期〕写

『群書類従』本を字詰まで忠実に書写した転写本。『左京大夫

顕輔卿集』と合綴。

天理図書館蔵（九一一、二三―六七）本　一冊

写

『群書類従』本を近時に書写したもので、92詞書途中までの書きさし本。『寂然法師集』『寂蓮法師集』『兼好法師集』『祭主輔親卿集』『大蔵卿行宗卿集』と合綴。全て『群書類従』転写本と思われる。

(ホ)

この一群は、小沢蘆庵校訂本に属する河野信一記念文化館蔵本、竜谷大学蔵四十人集本、内閣文庫蔵本と、それに属さない神宮文庫蔵一本、大阪府立図書館蔵本、国会図書館蔵二十六家集本とに分かれる。またいずれも『左京大夫顕輔集』と共に書写されるという特徴がある。

今治市河野信一記念文化館蔵（三四六―八三九）本　一冊

〔江戸後期〕写

〔私家集〕三四冊の内。楮紙袋綴。茶色刷毛引布目表紙（二七・六×一九・九糎）、左打付書「顕季集　四十一（朱）」。墨付、二八丁（扉を含む）、遊紙、前一丁。字面高さ、約二二・〇糎、毎半葉一二行書、和歌一行書。一オを扉とし、左肩に「顕季集」とし、二オに内題「六条修理太夫集顕季イ（藍）」。奥書は二七ウより二八ウにかけてある。(ハ)神宮文庫蔵本と異同を示すと以下のようである。上が本書、下が神宮文庫蔵本である。

共三百首―其三百首

治承四年―本云治承四年

書写校合―書写校合了

書写之、仍校合早―書写之早、仍校合了

私書之―追私書之

だひしらず（藍）―題しらず

便とぞ見る―たよりにぞ見る

遣すとて―すとて

中太夫―中大夫

集付の違いは省略した。印記は内題下に「紅梅／文庫」の朱印がある。全巻に、藍及び稀に朱の校合書入及び頭注が施されている。

本書は小沢蘆庵による私家集集成本(9)中の一冊であり、本集には蘆庵の奥書はないが、他集には、安永天明の年記をもつ蘆庵の奥書がある。本書が蘆庵の自筆か、あるいはその転写本か断定しかねるが、次の竜谷大学蔵本よりは明らかに原本に近いと思われる。

藍及び朱の書入は蘆庵の勘注で、本文不審個所に校訂案を示したり、類歌を頭注したりしている。42詞書の一部と92歌本文の欠脱は藍で補っており、『堀河院百首』は、一八オ途中よりウ途中までを空白として、「本此間有二堀川百首一、急写略レ之、他日可二補入一」と朱書する。

注の一例をあげると、二オの4の頭注に類歌として「古今夏みつね／郭公声も聞えず／山びこは外になくねを／こたへやはせぬ」と藍の書き入れがある。

竜谷大学大宮図書館蔵（〇二二―五九一）本

〔江戸後期〕写　一冊

『四十人集』四十冊の内、第十六冊。楮紙袋綴。香色波形文様表紙（二七・〇×一九・八糎）、左肩打付書「六条修理太夫顕季集」。墨付、二七丁、遊紙、前一丁。字面高さ、約二二・〇糎、毎半葉一二行書、和歌一行書。内題、一オに「六条修理太夫集顕季イ（朱）」。奥書は河野信一記念文化館蔵本と同一である。印記、見返しに「写字台之蔵書」の朱印。

本『四十人集』については、既に吉川理吉氏「写字台文庫旧蔵　四十一集の解説（一）」（竜谷大学『国文学論叢』1、昭23・7）に紹介されているように、小沢蘆庵による私家集集成本の転写本である。字詰、漢字と仮名の区別に至るまで、ほぼ河野信一記念文化館蔵本に一致するが、書入は朱墨でされており、42詞書の一部と92歌本文の欠脱は朱で補われ、『堀河院百首』は一七オ途中よりウ途中までを単に空白としている（丁数が河野本と一丁ずれるのは前者に扉一丁があるためである）。

本書は河野本に酷似しているが、一部校訂案が本行化したり、書入に微妙な違いが散見され、直接の転写本と断ずることはためらわれる（この点も、河野本を蘆庵自筆本と断じにくい理由である）。しかし、蘆庵自筆本よりの相当に忠実な転写本と考えられる。

内閣文庫蔵（二〇一―七七二）本

〔江戸後期〕写　一冊

『左京太夫顕輔集』と合綴。薄葉紙袋綴。茶色刷毛目表紙（二七・五×一九・八糎）、左肩打付書「修理大夫顕季集／左京大夫顕輔集」。墨付、一～三三丁が『六条修理大夫集』、三四～五二丁が『左京太夫顕輔集』、遊紙、前一丁。字面高さ、約二一・五糎。毎半葉一〇行、和歌一行書。内題、一オに「六条修理大夫集顕季イ」。奥書は河野信一記念文化館蔵本と同一であるが、「だいしらず」とある点のみ異なる。本書も蘆庵本系の転写本で、頭注、傍注等共通するが、全て朱で書入れられており、竜谷大学蔵本よりさらに、傍注の校訂案が本行化している点が認められる。42詞書の一部と92歌本文は朱で補われている他、『堀河院百首』は二一オ後半を空白とし、「本此間有二堀川／百首一、急写略レ之／他日可二補入一」と朱で頭書している。

神宮文庫蔵（三―一一二八）本

〔江戸中期〕写　一冊

『左京大夫顕輔集』（三―一一九二）と合綴。貼付ラベルには『左京大夫顕輔集』の番号が記入されている。楮紙袋綴。茶色刷毛目表紙（二六・三×一九・四糎）、左肩に「修理大夫顕季／左京大夫顕輔」と二行割にした下に「家集」とし、「全（朱）」と全て打付書。墨付、一～二六丁が『顕季集』、二七～四〇丁が『顕輔集』、遊紙なし。字面高さ、約二一・五糎。毎半葉一三行書、和歌一行書。内題、一オに「六条修理太夫集顕季」。奥書は蘆庵本系諸本と同一であるが、「詞五通共」は「詞五通其」とあり、また369詞書「池氷」を「池水」に、372第四句「あらし」を「山風」に誤っている。印記、一オに「林崎／文庫」「林崎文庫」「勤思堂」の印、裏表紙見返しに村井敬義の奉納印がある。

本書は、朱の校合や訂正が若干あるが、蘆庵本系諸本のもの

とは一致せず、本文も若干異なっている。なお、92の歌の脱落は朱で補われており、また『堀河院百首』は一六オ半ばに「原本此下載二堀川百首一、他日可二補写一」とあり、一六ウまで一丁半を空白としている。

大阪府立中之島図書館蔵（二二四、五―五六）本　一冊

〔江戸末期〕写

『左京太夫顕輔集』と合綴。楮紙袋綴。香色表紙（二六・〇×一八・八糎）、左肩子持枠題簽「六条修理太夫集／左京太夫顕輔集」。墨付、一～二六丁が『顕季集』、二七～四〇丁が『顕輔集』、遊紙なし。字面高さ、約二一・五糎。毎半葉一三行書、和歌一行書。本書は、神宮文庫蔵（三―一二二八）本と、ほぼ字詰まで同じくし、その転写本と思われる。奥書も同一であるが、「詞五通」を「詞返」と誤る。また『堀河院百首』の省略個所は注記なく空白としている。印記、表紙見返しに「初代豊田文三郎氏／遺書」、一オに「四条／蔵書」の朱印がある。

若干独自の書入や付箋もあるが、神宮文庫蔵本に比べると、誤写をさらに増し、虫損も多い本である。

国会図書館蔵（二〇二―八七）本　一冊

〔江戸後期〕写

『二十六家集』の内。本来七冊のものを現在四冊に合綴、『六条修理大夫集』は第四冊に所収。楮紙袋綴。「帝国図書館蔵」の文字を浮き出させた後補茶色厚紙表紙、左肩子持枠題簽「二十六家集　四止」、中央に「顕輔／故刑部卿／六条修理大夫／国基／大江千里／定頼／経信／基俊」と並記し、下に「集」と打付書。元表紙は、香色布目表紙（二三・八×一六・五糎）、左肩青色題簽「顕輔　六条修理大夫／故刑部卿　国基」と並記し、下に「集　三」とある。墨付、一八～四一丁が『六条修理大夫集』。字面高さ、約一三・七糎。毎半葉一三行書、和歌一行書。内題、一八オに「六条修理大夫集」。『堀河院百首』の省略は「本ノ」とし、数行空白とする。奥書、蘆庵本系諸本と同一であるが373詞書中「蔵人に」の「に」を脱する他、「中太夫」は「中大夫」とある。印記、「榊原家蔵」の墨印、「故榊原芳野納本」の朱印があり、榊原芳野旧蔵本。

国会図書館蔵の『二十六家集』はその所収家集の細目が、小沢蘆庵の私家集集成に似ているので、あるいは蘆庵本に属するかとも思われるが、蘆庵の書入や奥書はなく、本文も若干異っているので、蘆庵の集成とは無関係のようである。

本書は、独自の脱字、脱文が散見されるが、むしろ、蘆庵校訂以前の形態を存しているのではないかと思われる点もある。

ヘ

神宮文庫蔵（三―四三六一）本　一帖

〔江戸初期〕写

雲母引斐紙綴葉装。青色表紙（二三・〇×一七・四糎）、左肩金切箔散題簽「修理太夫顕季家集」。墨付、四三丁、遊紙、前なし、後二丁。字面高さ、約一九・〇糎。毎半葉一〇行書、和歌一行書。内題、一オに「六条修理大夫集」。奥書、神宮文庫蔵（三―一〇六八）本と同一であるが、以下の異同がある。

「其三百首入」なし。

本云
建長五年―建長五年
書写了―書写之早
さうぞくつかはすとて―さうぞくすとて
印記、一オに「御巫／書蔵」の朱印があり、御巫清直旧蔵本。

本書には落丁がある。墨付第五丁の次に二丁分、第一〇丁の次に一丁分の脱落があると思われる。つまり、本書は、三折からなるが、第一折が本来八枚の料紙を二つ折にして成っていたのが、内側の一枚、外側から二枚目の一枚の計二枚が失われたものと認められる。落丁部分は、34詞書途中の「河じりより」の「より」から50詞書まで、89歌部分より99詞書までに当る。

このため、諸本分類の基準である42と92の個所が失われていて、分類を難しくしている。更に、本書は『堀河院百首』が本来存したかどうかにも疑問がある。なぜなら、『堀河院百首』の271海路題の歌が、諸本「おほみ舟したなに浪はかくれども藤戸をさして島づたひゆく」とあるのに対し、本書は第二句以下が「ゐなのゝ沖のやしほぢにからろばかりぞまかぢしげぬく」となっており、全く異っている。ところが、この歌は、顕季の歌ではなく、『堀河院百首』証本では、顕季の次にある源顕仲の歌である。これは、本書が『堀河院百首』を本来欠いていて、『堀河院百首』証本から抜き出して補塡する際、誤って、顕季の次の源顕仲の歌を抜いてしまったとしか考えられない。そうした推測を補強する点がもう一つある。

それは、『堀河院百首』の春七首目の題は、本書以外の『六条修理大夫集』には全て「梅花」とあり、一方、『堀河院百首』証本では大部分「梅」とあるのに、本書は「梅」とあり、証本に一致している点である。[10]

以上の点から、本書の『堀河院百首』は『堀河院百首』証本によって補われたものと考えられる。[11]

しかし、本文的には(ホ)諸本とは明らかに異っており、(ハ)諸本に近い点も認められる等の点もあるので、さし当り、別にしておくこととする。ただ、特に善本でもないゆえ、大勢には影響ない。

二、和歌の年次推定

『六条修理大夫集』中の和歌の年次推定は、戸谷三都江氏「六条顕季の歌　その一――堀河百首を中心に――」(『学苑』昭35・1)で試みられたのが最初で、井上宗雄氏『平安後期歌人伝の研究』(八五―九五頁)では、家集の年代順配列を利用した考証がなされている。ことに井上氏の考証は要点を尽くされていて、異見もほとんどないのであるが、多少考証を略された点も見受けられるので、それに従いながら一覧してみたい。

なお、家集は「少なくとも基本になっている資料については自撰のものであろう。」(井上氏前掲書八九頁)とされているが、『私家集大成』本で明らかに後人のものと認められる285詞書の傍注「中院右大臣也」と348詞書「贈左大臣家」の字句は(イ)大東急記念文庫蔵本にはいずれもなく(前者は(ロ)京都大学蔵本、(ニ)群書類従本等にもない)、ほぼ全体を自撰とみてよいであろう。

以下に年次推定及び詞書中の人名比定を行う。年次推定は『私家集大成』番号、推定年次、典拠の順に、人名比定は、『私家集大成』番号、家集中の呼称、人名、注記の順に示す。また、考証を必要とするものは、（考1）（考2）として後に説明を加えることとする。なお、本文は原則として『私家集大成』本により、注目すべき異同がある場合は諸本と比較することとする。

年次推定

1 承暦二年（一〇七八）四月廿八日（歌合証本）
2 寛治五年（一〇九一）八月廿三日（歌合証本）
3 寛治五年（一〇九一）十月十三日（歌合証本）
5 寛治七年（一〇九三）五月五日（歌合証本）
8～11 嘉保二年（一〇九五）八月廿八日（『中右記』）
16 応徳元年（一〇八四）三月十六日（『後二条師通記』『中殿御会部類記』）
20～21 承保元年（一〇七四）二月？（『津守国基集』『公卿補任』）（考1）
22 寛治五年（一〇九一）十月一日（『後二条師通記』『中右記』『為房卿記』）
29 永長元年（一〇九六）二月廿三日（『後二条師通記』『中右記』）
42～43 康和三年（一一〇一）正月十一日（『中右記目録』『長秋記目録』）
64 康和三年（一一〇一）十月廿七日（『殿暦』）
68～69 康和五年（一一〇三）正月一日？（『中右記』）（考2）
74～76 康和四年（一一〇二）閏五月一日（「閏五月」ある年）
77～78 康和四年（一一〇二）閏五月七日（歌合証本）
92 長治元年（一一〇四）四月廿四日（『中右記』）
101 寛治五年（一〇九一）十月十三日（歌合証本）
107 長治二年（一一〇五）三月五日（『中右記』）
108～109 長治二年（一一〇五）三月廿余日（「閏二月」ある年）
110 嘉承二年（一一〇七）三月六日（『中右記』『殿暦』）（考3）
115～116 嘉承元年（一一〇六）正月七日？（「正月七日、子日」の年）（考4）
131～132 永久二年（一一一四）十二月廿六日（『中右記』）[12]
151～160 永久元年（一一一三）春？（「春くはゝれる年」）（考5）
168 永久三年（一一一五）夏？（「内府」は忠通）（考6）
176～180 永久四年（一一一六）四月四日（歌合証本）
181～280 長治年間（一一〇四―六）？
286～288 元永元年（一一一八）五月（歌合証本）
298 元永元年（一一一八）六月十六日（『柿本影供記』『古今著聞集』）
301～304 元永元年（一一一八）六月廿九日（歌合証本）
326 元永二年（一一一九）四月十一日（『長秋記』）
333 元永二年（一一一九）七月十日（『長秋記』）
347 保安二年（一一二一）閏五月十三日（歌合証本）
348～350 保安二年（一一二一）閏五月廿六日（歌合証本）
353～356 保安二年（一一二一）六月廿八日？（『続詞花集』）（考

7）

365～366保安四年（一一二三）春（「新院」は鳥羽院）

人名比定

2藤中将（藤原宗通）

3 18二位（従二位藤原親子）

10いなばのかみ（藤原長実）

36橘のなりとも（不詳）（考8）

70藤大納言（藤原公実）

74新大納言（藤原経実）

79 108 326平等院のあざり、僧正（行尊）

87せんさきのさいゐん（不詳）（考9）

104江中納言（大江匡房）

111荘厳院法眼（実覚、源師房子？）（補注）

115中納言（藤原仲実、実季男）、前斎院（令子内親王）

129真尊阿闍梨（藤原良綱子？）（考10）

131くら人のじゞう（藤原成通）、ゐちごのかみ（藤原敦兼）

133だいごの座主（勝覚、源俊房子？）（考11）

163雲居寺上人（瞻西）

168内府（藤原忠通）

285 286新中将（源雅定）

301兵衛のかみ（藤原実行）

323とさのかみ（藤原顕保、家保男）、はりまのかみ（藤原基隆）（考12）

348贈左大臣（藤原長実）

353皇后宮（令子内親王）

362兵衛のかみ、くら人のぶつね（不詳）、みまさかのかみ（藤原顕輔）（考13）

（考1）戸谷三都江氏、上野理氏『後拾遺集前後』（一一一―二頁、昭51刊）等が指摘されたようにこの贈答は『津守国基集』128～129（『私家集大成』本）に見えており、顕季を「兵衛佐」と呼んでいる。『公卿補任』によれば「同〈延久〉六正廿八左兵衛権佐。承保二正廿八讃岐守」とある。讃岐守になった時、左兵衛権佐をやめたとは限らないが、以後は「讃岐守」と呼ぶのが普通であるから、「又のとしの二月」は承保元年（一〇七四）の可能性が強い（承保二年の可能性もなくはないが）。[13]

（考2）この贈答『金葉和歌集』二度本7～8、三奏本7～8（『新編国歌大観』本）に、それぞれ「む月のついたちころ」「正月朔」として見え、『公実集』断簡（『私家集大成』）にも「むつきのついたち」とある。配列では、康和四年（一一〇二）辺りであるが元日ころ雪はない。戸谷氏は降雪の記録から長治二年（一一〇五）とされるが、あるいは、前年の暮から雪が降り、十二月卅日に「白雪高積、寒気殊甚、」とあり、翌元日に「天晴、但宿雪留〻庭、」（『中右記』）とある康和五年（一一〇三）か。

（考3）家集詞書は「長治二年三月四日、行幸して三日おはしましたび、池上花題」とある（諸本日時に異同なし）。配列からは「長治二年」で相当であるが、該当行事が見当らず、月日及び題の一致から、嘉承二年（一一〇七）三月五日から八日にかけての鳥羽殿行幸を誤ったとしか考えられない。配列から

いって、この誤りは当初からあった可能性が高い。

（考4）「正月七日、子日にあたりたりしに」とあるので、長治二年（一一〇五）、嘉承元年（一一〇六）、天仁二年（一一〇九）のいずれかである。[14] 年代順の配列を考慮すると、110が前述のように嘉承二年ゆえ、天仁二年が有望だが、110は長治二年（一一〇五）と誤認して収められているようなので、嘉承元年でもよいことになる。

また、詞書中の「中納言」と「前斎院」を誰ととるかも難しい。「中納言」は藤原仲実（実季男、顕季の婿、康和四年正月権中納言）か藤原宗通（俊家男、顕季の婿、承徳二年正月権中納言、天永二年正月廿三日権大納言）、「前斎院」は令子内親王（康和元年より天仁元年までの呼称）か禎子内親王（天仁元年より保安四年までの呼称）である。

このうち「中納言」は、右衛門督や按察使の兼官のある宗通より兼官のない仲実の方が有力で、「前斎院」は353～356に「皇后宮」として見えている令子内親王の方が有力である。また、仲実は顕季の高松第に住んでおり、顕季が代作するのに都合がよい。[15]

不確定な要素が多いが、嘉承元年、藤原仲実、令子内親王の組合せが最も可能性が高い。

（考5）戸谷氏が指摘されたように「於二七条亭一、人々、桜歌十首よみしに」と詞書された歌のうち、152下句に「春くはゝれるとしのしるしに」とあることから、閏三月のある永久元年（一一一三）であろう。[16] もっとも「春くはゝれる」を春に閏月のある年と考えて、閏正月のある永久四年（一一一六）の可能性もあるとする井上氏説もある。

なお『散木奇歌集』第一、二月、67～76（『私家集大成』本）に「修理大夫顕季卿六条家にて、桜歌十首人〳〵によませ侍けるに」と詞書する歌があり、披講場所が異なるが同じもののように思われる。もし、そうだとすると「二月」に入れたのは何か根拠があるのかもしれない。

（考6）井上氏は「内府」を源雅実とされるが「東三条」は藤原忠通第であるから、「内府」は忠通であり、任内大臣は永久三年（一一一五）四月廿八日である。配列と季節から永久三年夏の可能性が高い。

（考7）この歌の年次については、注（1）拙稿でふれたことがあるが、353詞書「皇后宮にて庚申夜、晩暁風如秋并恋」、355詞書「おなじ夜又、草のはなをまつ并恋」の二つから、『続詞花和歌集』巻三の美濃の歌をその詞書「みな月の比ほひ、二条の大き大后宮、待草花歌人々によませ給けるに」（群書類従本）によって同時のものと認め、家集の配列（保安二～三年が相当）をも勘案し、これらの条件を全てみたす日を捜すと、保安二年（一一二一）六月廿八日が求められる。この月日は、「晩風如秋」という題にも季節的に矛盾しない。

（考8）この人名は、「橘長基」(イ)大東急記念文庫蔵本）、「たちばなのなかもと」(ロ)京都大学蔵本）、「橘のなかとも」(ハ)書陵部蔵本以下(ニ)(ホ)に属す数本）等異同があるが、該当する人物を見出しえない。

（考9）諸本異同なし。(イ)大東急記念文庫蔵本は「せん前の斎院」。「前前斎院」であろうか、不詳。

（考10）『尊卑分脈』には、師尹公孫藤原定任子真尊（寺、二会講師）と長良卿孫藤原良綱子真尊（山、権律師、北野別当）の二人が挙げられているが、多分後者であろう。平林盛得・小池一行氏編『僧歴綜覧』（昭51刊）では真尊は一人として扱っているが、『僧綱補任』の応徳三年（一〇八六）に「五十二。肥後守定任子」と見える真尊と、永久元年（一一一三）以後に見え、保安元年（一一二〇）五月十二日に五十六歳で入滅した真尊とは別人で、それぞれが定任子、良綱子に当ると考えるべきである。良綱子の真尊は記録に散見されるが、嘉承元年（一一〇六）七月一日勅勘を蒙ったことがあり、『中右記』保安元年五月十三日条に「今朝以レ使問二真尊律師病悩一之処、使帰来云、昨日已入滅、初聞二此事一、誠以如レ夢、年来云二雑事一之人也、真尊ハ故但馬守良綱朝臣息男、故仁覚座主弟子也、頗為二学生一補二北野別当一後、当三時北野行幸賞一任二権律師一也」とある。

（考11）『醍醐寺座主譲補次第』（『続群書類従』巻九七所収）によれば、可能性のあるのは、応徳三年（一〇八六）六月十六日に第十四代の座主に任ぜられた勝覚（源俊房子）と、勝覚に次いで永久四年（一一一六）五月廿三日に第十五代座主に任ぜられた定海（源顕房子）とである。いずれとも決し難いが、家集の配列を信ずれば、前者の方が可能性が高そうである。

（考12）323は家集の配列によれば、元永二年（一一一九）春ごろかと思われる。当時の「とさのかみ」は、顕季の孫である家保男顕保、「はりまのかみ」は藤原基隆（家範男）であった。前者は『中右記』元永元年（一一一八）十一月廿五日条、保安元年（一一二〇）六月廿二日条にともに「土左守顕保」と見え、後者は『公卿補任』により、永久三年（一一一五）より保安二年（一一二一）にかけて播磨守であったことが確認される。なお、基隆が顕保を婿にしたことは他に所見がない。

（考13）362は保安二～三年（一一二一～二）ごろと考えられるが、詞書も不明瞭で難解である。「兵衛のかみ」は顕季の婿藤原実行（保安三年十二月廿一日まで右兵衛督）か、顕季の孫藤原伊通（実行の後、右兵衛督に任ず）かと思われるが、「くら人の少将」とあるが、誤写ではあるまいか。「くら人のぶつね」が比定できない。(ロ)京都大学蔵本のみ「みまさかのかみ」は顕輔でよいであろう。

〔注〕

（1）拙稿「藤原顕季伝の考察」（「国語と国文学」昭52・8）

（2）「『六条修理大夫集』の問題点」（中世文学会口頭発表、於山梨大学、昭52・11・12）

（3）(ロ)京都大学蔵本がやや異色の本文を持つことから、『私家集大成』解題（上野理氏執筆）はそれを「定家本系」（定家風の書体を臨写しているため）とし、他の諸本を「流布本系」と二つに大きく分けているが、(イ)大東急記念文庫蔵本の出現により、(ロ)の独自の特色と思われた異文の一部が(イ)にも共通することが判明したので、二つに大別せず、単に並列する分類法をとった。

(4) 「詞五通」の下の三字読みにくい。諸本は「其（あるいは共）三百首」とあるが、本書の字形は「モシて」に近い。あるいは「其三首」か。注（5）の『弘文荘待賈古書目』もそう読んでいる。「和哥」以下とほぼ同じ奥書は京都大学蔵本を除く全ての本にあるが、歌数が現存歌数三六八首と異なる等不審がある。

(5) 本書は『弘文荘待賈古書目』25（昭30・11）に所載され、『国書総目録』には「遠藤武（重美）」と見えている。

(6) (A)は二行分、(B)は一行分の脱文であろう。

(7) (ロ)京都大学蔵本は「いたうなうらみそ」とあり、これがよい。

(8) 群書類従本も「みづがきのいと久しくも」とある。

(9) 小沢蘆庵の私家集集成については、久曾神昇氏「小沢蘆庵と和歌集蒐集」（「書誌学」昭12・4）及び井上宗雄氏「小沢蘆庵本歌合集・私家集について——今治本歌合集を中心に——」（「和歌史研究会会報」65昭52・12）に言及されている。

(10) 橋本不美男・滝沢貞夫氏『本校堀河院御時百首和歌とその研究本文研究篇』（昭51刊）による。

(11) 神宮文庫蔵御巫本がどのような『堀河院百首』証本によったかはよくわからないが、源顕仲の歌を存することから、永縁を欠く一五人本か一六人本であり、前者は伝本稀ゆえ、一六人本であった可能性が高いといえよう。

(12) 戸谷氏論文参照。

(13) 戸谷氏がとり上げられた『公卿補任』の「同〈承保〉三正五従五上（左兵衛尉労く）（労）。」の記述は、その前の「延久元十二十七左兵衛尉。」に関わるもので、当面の問題には関係ない。

(14) 井上氏が前掲書九一頁で「一一五は正月七日が子日に当った年の贈答歌だが、長治二、嘉承元、天仁元年の内の何れかで、或は天仁元か。」とされた「天仁元年」は「天仁二年」の勘違いか。

(15) 『中右記』永長元年十二月二日条参照。

(16) 戸谷氏が閏三月ある年として永久二年（一一一四）とされたのは勘違いであろう。

〔補注〕『今鏡』藻塩の煙に「山階寺の実覚僧都など申しておはしき。荘厳院の僧都と申しゝなるべし。」とある人物か。

〔付記〕本調査に際し、御所蔵の図書の閲覧・複写を許された諸文庫・機関に深く感謝の意を表する。

なお、本稿脱稿後、内田徹氏「「六条修理大夫集」について」（和歌文学会例会口頭発表、於駒沢大学、昭58・9・17）の発表があった。本稿の「一、諸本」と関わる点が多いが、あえて加筆をさし控えた。